



『世界と日本-1994.10.10』  
『味清風』

る。中国が食い下がれば下がるほど大人げなさか露呈されるのとは逆に台湾の存在感が浮上する。北京としては読みの浅い懸引だ▼なぜなのだろう。先ず考えられるのは、政治の民主化と経済力を背景にした台湾の実務外交の展開でその国際的地位上昇に対するやっかみであろう。先進諸国の閣僚の相つぐ訪台、米上院の台湾閣僚クラスへのビザ発行承認等々、それらは二つの中国への客観情勢の成熟と北京には映じていよう。その北京にとって日台関係の緊密化は何としても阻止せねばならない重要課題なのである▼血は水より濃い、中台は早晩一つに統一されるといのが日本の台湾疎外の一つの根拠にされている。そうだろうか▼大陸十三億の生活レベルを一%上げるには台湾二千万の生活レベルを九七%下げねばならぬとの試算がはじかれている。一人当りGNPでは一万ドル対四百ドルで二五対一の格差だ。台北がそんなバカげた選択をするはずがない。つまり台湾は一個の政治実体として半永久的に存在し続けるといこととだ▼その意味からも台湾を含めての対中政策を練り直すべき時期にきている。それを如実に教えたという点において広島大会は意義があった。